誠意で、熱心で眞劍で生命を打ち込んでの唯だ一直線の難行苦行、そこから頭の下がる藝術が生れる。

活歴流行の餘響

附 改作ばやり

明治維新といふ乾坤一擲の大變動は、思想的にも異常な革命があつて、西洋崇拜とこれに反動する歴史的懐古趣味とが、不均衡な矛盾を起して外的に現はれて來た。かうした變調は一般社會の上ばかりでなく、演劇界にも當然その現はれを見せ、わが固有藝術の文樂座の人形淨瑠璃にも不可思議な姿をあらはしたのである。淨瑠璃史の上の小波動として、記述する必要があると思ふ。

時世に觸れることに敏感であつた當時の文樂座の經營主植村文樂翁（大助）が、盛んな活躍をつゞけてゐた時のことだから、無論かういふ姿を見せたのは當然のことではあるが、明治五年十一月十五日初日の松嶋文樂座の『出世太平記』に早くもその發芽を見せてゐる。これは三日太平記の改題で、武智を明智、眞柴を羽柴と改めてゐる。こんな程度でまだ内容に觸れてはゐないのだから、活歴とは云へ、それはほんの鋒鋩のあらはれに過ぎない。だが年と共に次第に濃厚になつてくる。翌六年一月には文樂の舊地博勞町稲荷社内の芝居で（博勞町の文樂座は五年冬に燒け直ちに新築、その舞臺開きと續いて一興行だけ此處に移つて興行した）活歴式の忠臣藏を惣掛合で出した。判官を淺野内匠頭、勘平を萱野三平、由良之助を大石内藏之助、師直を吉良上野之介、九太夫を大野軍右衛門、本藏を梶川與三兵衛、鄕右衛門を原惣右衛門、平右衛門を寺坂吉右衛門と實錄ぶつたまではわかつてゐるが、おかる、おいし、となせ、顏世、小浪、定九郎、伴内、など、穿鑿の路に迷つたらしいのは愛嬌である。

而してその年六月、松嶋文樂座での『鎌倉三代記』には、鎌倉の二字を故意に削つて、角書き付きの仰々しい名題が巾を利かすことになつた。こんな容子に、

大元帥は眞田左衛門尉奇術の軍配
名將は德川老君智仁の陣取　**三代記**
簇大將は後藤又兵衛英勇の鋒先

陣屋を『茶臼山陣所』和田兵衛屋敷は『後藤又兵衛屋敷』摺針太郎住家を『長曾我部住家』三浦之助別れを『木村母閑居』などと改め、人名も、嶋津の大樹、木村重成、德川老君、眞田幸村、內大臣秀頼、淀君と悉く實名を用ひて床本に大改正を施し、同年八月このまゝを京都の都萬太夫座へ持越した時には、『實傳大阪夏陣記』と單刀直入に題を變へてゐる。これ等はいふまでもなく德川政府を憚かつて書いた舊來の作品を、明治政府になつた上は、誰れに憚ることやあらん、と云つたやうな、殼を破つた心持から來てゐることは知れきつてゐる。この史實かぶれの傾向は、東京に於ける、九代目團十郎の活歷芝居の報ひを得るに及んで、いよ〳〵猛烈になつて來てゐるが、植村文樂翁の策戰であつたことはいふまでもない。（他の諸座ではこの傾向が無いところから見ても）ところが團十郎の活歷芝居は、人形淨瑠璃の單に外題だけの活歷かぶれとは違つて、衣裳、道具、持物等に至るまで史實を正して、明治七年七月、河原崎座再興の初興行に、備後三郎楠未來記に正成を烏帽子裝束といふ史實張りで演じて世間を驚かしたが、結果は、三河萬歲だなどといふ酷評を受けるに止まつてゐた。だが團十郎が最初に活歷の鋒先を見せたのは、明治六年五月の『浪花眞田軍記』である、だから文樂の五年十一月の方が一歩を先んじてるわけである。ところが團十郎の方では、その後福地櫻痴居士に注告されて一時は活歷を思ひ止まつてゐたが、これに代るに櫻痴式の史劇といふものが段々巾を利かして來た。その流行熱が大阪へも流動して芝居は勿論、文樂も大いに影響を受けてゐる。

先代萩の仁木彈正が原田甲斐になり、外記が伊達安藝とかはり、八陣守護城の北條時政が德川家康、加藤朝淸が淸正、お通が淀君、と皆假面を脫ぎ出した。近江源氏先陣館の人名の如き、或は日本賢女鑑の題名を繪本賢女鑑、三日太平記から出世太平記更にまた豊臣太平記になるやら、信仰記を信長記にするやら、なんでも彼んでも事實でなければおさまらないといふやうな有樣になつて來てゐる。ところが、團十郎が鳥帽子姿だけの史實ぶりを見せたり、外題や人名だけの史實ぶりが、所詮は不徹底なものであつて、直ぐに識者からその淺薄さを嗤はれたのは當然の話で、單なる外題や人名の變更は內容との矛盾を直ぐ發見することが出來るからである。假令ば、忠臣藏の大序で、冒頭の『佳肴ありと雖、食せざれば其味を知らずとは國治まりて善き武士の忠も武勇も隱るゝに譬へば星の晝見へず夜は亂れて現はるゝ』の星の字に忠臣大星を利かした文だが、これを大石としては、どうも句を成さない、太功記十段目でも、眞柴久吉なればこそ『こゝに刈り取る眞柴垣』と云へるが、羽柴垣では物に成らない。『小田の蛙の鳴く音』でよいのだが、織田に改名されては蛙の方から不服が出るかも知れない。かういふ例を拾へば殆んど際限が無いが、八陣に、琵琶湖の段を浪花入江の段と改めた爲めに

『水碧に砂明らかなる兩岸の苔』が變てこになる。この文句はどうでも湖の兩岸でなくてはならないわけで、淀川ではものにならないこんなわけで、內容に伴はない徒らな時代かぶれの穿鑿癖は、時代思潮のあらはれとしてのみ存して、次第にまた舊態に復して行くことになつて、明治十六年一月の京都での忠臣藏上演の際には完全に復舊し、十八年から二十一年にかけて、もう全く活歷風の跡を絕つに至つてゐる。

而しかうした穿鑿癖がこんどは、新奇を逐ふ改作熱といふ傾向に變つて來た。いつの時代にも免がれ難い、新らしがりの流行であるが可なり盛んに行はれた。無論不用意な改惡であることはいふまでもないことである。

その改惡黨には不幸にして當時第一位にある某太夫なども混つてゐる。ちよつと例を揚げて見ると、こんな調子だ。

彥山權現誓助劍、毛谷村で、おそのが六助の名を聞いて驚き、ウツカリ見とれる條に、『エ、わつけもない、なんの家來の一人や二人、どうなとしたが、よいわいナア』といふところ。これを『エ、わつけもない、モウ疑ひは晴れたわいな』と改めてゐた。

太夫の意思では、いかに戀人に逢ふた嬉しさとは云へ、一味齋の娘ともあらうものが家來の一人や二人、死んでも構はぬといふやうな亂暴なことを云ふ筈がない。かういふので、この改作となつたと推測して差支ないが、穿き違への甚しいものであつて、おそのは相撲取のいたち川も驚いた程の『我れより拔群大女房』であつて、巴、板額、の類の女丈夫で、骨柄も立派、劍道も名人、女でありながら親の敵を狙ふ、しつかり者。それが戀人の前に在つては何者もなく、（家來の如き勿論）女はやはり女である、と見て作者は至情的に、その味はひを書いてゐるのである。その苦心の狙ひどころを、理窟めかした解釋で太夫は何んの顧慮するところも無く改作をしたので、もとより取るに足らぬことである。これに對して、對の挿話が一つある。それは名人豐竹湊太夫の、毛谷村である。湊は終始女丈夫として語り、この『なんの家來の一人や二人……』の此處のところは越路とは反對に、語調一轉、いかにも處女らしい羞恥を含んで戀人の前に女らしい情合をあらはすことに成功したと云はれてゐる。天下に太夫らしい太夫なしと言ひ放つた團平も、この語りぶりには感歎の讃辭を惜氣もなく呈してゐること、逸話としてのこつてゐる。

この太夫ばかりではない、此改惡餘弊は、同じく一流の太夫が、双蝶々の橋本の段で、駕の甚兵衛が娘の吾妻を誡しめるところ『きのふ洗ふた單物、四文が糊を棒にふつた』といふ文句、四文の糊では多過ぎるからとて四文を二文に改めて語つた、これも事實穿鑿に墮した改惡で、一文にも値ひせぬ　かういふ類は隨分數多く行はれた。